

The World Times -10月号-

2-1 鈴木心愛 1-1 庄司こども

今月号のWorld Timesは、NPO法人「ふじみの国際交流センター(FICEC)」を紹介します。私たちは、今年の24時間テレビを見て、「ふじみの国際交流センター」の皆さんが長年外国の方のために活動なさっていることを知り、活動の中で感じることや、国際交流に対するお考えを伺いたいと思い、取材を申し込みました。そして9月16日に、理事長の石井ナナエさんにオンラインでお話を伺うことができました。ホームページの内容と合わせて報告します。

1. ふじみの国際交流センター(FICEC)について

「自立支援と多文化共生」をミッションに掲げ、埼玉県ふじみ野市を拠点として、**日本に住む外国人の支援活動**を行っている1997年発足のNPO法人です。通訳以外のサービスは基本無料で、これまで**5万人以上**の外国人の助けになってきました。主な活動内容は次の6つです。

1. 生活相談

年間約**600件**の相談を、外国籍スタッフと日本人スタッフが受けている。その内容は、**医療、家族、教育、生活など**多岐にわたり、一緒に病院に行きたい、DVを受けている、子供が学校でいじめられる、生活費が足りないなど。特にコロナ禍では、母国に戻れないためビザの期間が延長されても、その間にお金がなくなった、病気になってしまったが保険に入っていない、といった問題に対する相談が増えた。「お金がない」という相談には、フードバンクの食品を渡したり、近所の方から寄付された生活用品を渡したり、「彩の国あんしんセーフティネット事業」など県の機関と連携したりして対応しており、「病気になってしまったが保険に入っていない」という人には、低額無料診断所を紹介している。



2. 日本語教室

全く日本語が話せない人から、中級・上級を目指す人、会話を楽しむ人まで様々な人が来る。**日本人スタッフが易しい日本語で**、名詞を学ぶことから始めて順を追って、ジェスチャーを交えながら教えている。**使用する教材は、スタッフが話し合いながら制作しており**、10月からは、交通ルールや日本独自の仕事に必要な用語について書かれた日本での生活の基礎を学べる本を製作する予定。



3. 国際子どもクラブ

両親または片親が外国籍の子供を対象に、大学生や元学校の先生がマンツーマンで、**日本語指導**を行ったり、**学校の宿題の質問や進路相談**を受けたりしている。

4. 多言語情報提供

センター開設時から、外国人に必要な生活情報を、英語、中国語、ポルトガル語など8カ国語で提供する情報誌「インフォメーションふじみの」を発行している。内容は、**生活相談を基に、今外国人に何を知らせなければならないか、外国人は何を知りたいか、を考えながらスタッフが話し合っ**て決めている。また、行政の多言語情報誌やごみ収集カレンダーなど、多言語情報の発信を手伝っている。

5. フードバンク

お米、レトルトカレー、お菓子、コーヒー・紅茶、水などの食品を必要とする人に無料で提供している。**人によって欲しい食品は異なる**ため、袋を渡し、欲しい食品を入れてもらうようにしている。棚を見て、**ひと目でどこに何があるかがわかる**ので、利用者が選びやすい。

6. 共生のまちづくり

小・中学校の総合的な学習の時間や、大学・公民館で外国籍スタッフによる**国際理解講座**を行っている。また、埼玉県を始め、県内各市町村と業務委託等による協働事業を進めたり、学校や自治体などの、国際理解・国際交流を目的としたイベントに全面的に協力したりするなど、**他機関と連携**して、多文化共生を目指し活動している。

2. 理事長の石井ナナエさんについて

1947年生まれ。1991年に「大井町日本語クラス」を開設し、外国人と交流する中で、日本にいる外国人の苦勞を目の当たりにしたこと、海外に行ったことのあるお子さんが、「どこの国でも親切にもらえる」と言っていたことをきっかけに、**自分が日本にいる外国の方に何かできないかと考え**、1997年に「ふじみの国際交流センター」を設立。現在「**ふじみの国際交流センター**」の理事長を務めています。

3. 石井ナナエさんの頭の中

最大の目的は”普通”

「最大の目的は在留外国人の人が普通の生活をして普通に日本語を勉強して、普通に会社に勤めて、普通に税金を払えるように、私たちに何ができるのかを毎日考えてやっています。」と、信念を語ってくださいました。生活相談についても、「お金がない人にお金を貸すことだけが外国人のためになるとは思っていない。彼らが自立して働いて税金を払えるぐらいになってもらいたいと思ってる。」とおっしゃり、税金を払うことを一つの目標にしているのだと感じました。

気がつけばSDGs

「最初からSDGsのことを考えて始めたわけではなく、外国の方が普通の生活ができるために何ができるかを考えてるうちに、それが今当たってみるといろんな部分に対応していたんだ。」と石井さんは振り返ります。昭和60年頃から活動しているため、当時SDGsなどはなく、まさに時代をずっと前から先駆けていたのだという印象を持ちました。「これも一人ではできない。スタッフがいて仲間がいたからできたことだから、ひとりではできないけど団体にねればできることが沢山あるってことを伝えたいです。」と私たちへのエールもいただきました。

やりたいことをやっているから無料で嫌だとは思わない

外国人支援の補助金はどこからも出ていないため、無料でやっているとなれば人件費はあまり払えないそう。それを申し訳なくスタッフさんに話すと、「私たちは**お金が目的じゃないんですよ**。」と教えてくださいました。「成果がすぐ目の前で見えることがやりがいかな。だんだん日本語が分かるようになって中には仕事が見つかる人もいます。悩んでいた人が解決して元気になってくれたりすると、お金にはならないけど、少しは役に立ってるのかなって思う。」と、活動のやりがいを伺うことができました。

新しい事覚えるって楽しい

「私は生活相談の担当で、嘘のことは言えないから、年中コロコロ変わる入管法を勉強したり、スーター法、DV法、保険、町にはどう制度やどう施設があるのかも知らないといけない。だから、74歳だけど、**年中新しい事覚えなくちゃいけない**。でもね、覚えるって楽しいですよ。すぐ役に立つから。例えば昨日DV法勉強して次の日DVの相談入ったらその人を助けられる。新しい事覚えたりするのは大変だけど、でも、すごくうれしいこと。」と、勉強が誰かの役に立つ喜びを教えてくださいました。

世界とつながる二次方程式

「ナイジェリアで船関係の仕事してた人と会話が途切れちゃったとき、船の仕事してるっていうから、 $x = \frac{-b}{2a}$ って書いてペンを渡したら、 $\pm \sqrt{b^2 - 4ac}$ って書き足したんですよ! ナイジェリアと日本の二次方程式の公式が一緒だったんですよ! もう嬉しくて。まだ会って全然経ってなかったのにもう昔から知ってるみたいに仲良くなれて。だから全員が二次方程式やれってわけじゃなくて、相手の好きなもので行くと打ち解けて心を開いてもらえる。だから私も二次方程式覚えって良かったって思ったんですよ。共通点が見つかるってこと。何にでも無駄なことはない。」と、素晴らしいエピソードをととても嬉しそうに話してくださいました。

日本の多くの方は、まだ他人のことを考えることがなかなかない

「自分以外の人のことを考えるのが大事。区別したり差別したりすることがないように。外国の方にとって日本語を覚えるのは大変です。日本語が分からないからってあの人は馬鹿なんだとかあの国の人はダメだとか思わない。とつても大変だということをまず頭に入れる。」と、日本人に必要なことは？という問いに答えてくださいました。

この国に求めたいこと

最近やっと入管庁という外国人に関係する省庁ができたように、日本はまだ未熟なことが多いそう。入管庁の設立の際に、長官から日本に住む外国人の様子を訊かれ、「少しずつ世の中が変わってきている。」と感じる一方で、「外国人が職に就けるようになるためには、まず日本語を教える制度が必要。」とお願いしてきたそうです。

高校生でもできること、

高校生だからできること

「高校生はまず高校の勉強をしっかりと日本のことをよく考えてほしい。自分のことだけじゃなくてもうちょっと周りのこととか近所、世界に関心を持ってもらう。マザー・テレサも言ったように最大の差別は無関心です。だから関心を持つことが差別をなくす第一歩。まずは周りにいる外国ルーツの人に関心を持つ。高校生だからできること、高校生でもできることいっぱいあると思うんで、周りに関心をもって。」と、まずは周りに関心をもつことが必要だと教えていただきました。

あなたのことを見ている人がいる

「あるイラン人の人が、日本の会社行くといじめられていて、でも病気のお父さんが国にいるからお金送んなきゃいけないって、辛くて辛くて仕方なかった時、イラン人の友達から『日本の会社行くことないよ。俺と一緒に池袋でコカイン売ればいい』って誘われてた。でも結局お父さんが急に亡くなってしまい、帰国する前日、たどたどしい言葉で『実はいつも友達に誘われて、会社いくといじめられるしお金がなかったし、悩んでた時にふわーって(皆の)顔が浮かんだ。あんなに普段一生懸命日本語教えてくれる人がいるのにももしも僕がコカイン売ったら悲しむだろうなって思って僕はコカイン売のをやめました』って言ってくれた。だからやっぱり、あなたを見てる日本人がいて、あなたは大事な隣人なんだってということが分かれば、人間ってそんなに悪いことはできないって思うんです。一人だと寂しいから。お金は出せないけど、考えてるよっていうことを伝えるようにしています。」と、孤立させないことの重要性が伺えました。

「日本人でも無職が犯罪につながるが多い。やっぱり無職はよくないから、日本人はもちろんですけど外国の方も職に就けるようにすることが大事。無職は経済的にも精神的にもつらい。外国ルーツの人もちちゃんと職に就けるように考えなくちゃなって思う。」と、就職できることの必要性を強調されました。

.....編集後記.....

今回のインタビューは私たちにとって、とても有意義なものとなりました。石井さんは、常に外国の方のためにどうしたらいいかを考えていて、全てにおいて世の中の一步先を進んでいるような方でした。特に私が驚いたのは、“外国ルーツの子”のところでは“ハーフ”ではなく『ダブル』という表現が使われたことです。差別を無くすためには、そういった小さな意識を私たち自身が変えることが必要なのだと強く感じました。(庄司ことみ)

インタビューに向けて「ふじみの国際交流センター」について調べたり、実際にお話を伺ったりした中で、一番強く感じたことは、私にももっとできることがあるのではないかと、ということでした。石井さんが、「自分以外の人のことを考えるのが大事。」「周りに関心をもって。」とおっしゃっていたので、まずはもっと周りを見ることを心掛け、そして、自分にできることを見つけて行動していきたいと思います。今回このような貴重な機会を頂き、本当にありがとうございました。(鈴木心愛)